

〈翻字〉九州大学附属図書館蔵『伊勢物語注釈』

藤島，綾
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/10361>

出版情報：文献探究. 35, pp.1-29, 1997-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：



〔翻字〕九州大学附属図書館蔵『伊勢物語注釈』

藤 島 綾

【凡例】

- 九州大学附属図書館支支文庫蔵『伊勢物語注釈』（函架番号 九二三二一）
／五 写本 一冊を翻字する。原本は縦一四・〇種、横一九・〇種。墨付八五丁。ただし、八〇丁裏以降の和歌五首は後世の書き入れの可能性が高く、今回は省略した。一面九行書き。外題、内題ともになく、前掲の書名は同図書館による仮題。『伊勢物語』六三段までのみ。
- 漢字表記は、原則として、通行の字体に改めた。
- 清濁の表記は底本に従った。
- 書き入れやルビは、（書入）（カ）の形で、当該語句の下に示した。
- 見せ消ちは（〽）（〽）の形で、それぞれに示した。
- 本文の明らかな誤りや不審箇所については、原文を残し、（〽）とした。
- 判読困難な箇所は□とした。
- 定家本に従って章段番号を付した。
- 適宜句読点を付した。

【翻字】

伊勢物語と云事 就題号云所

- 一、男女物語と云説は不用。伊勢か筆作をもて、此物語の題号と定らるゝよし、見えたり。されば、当流は此儀也。
- 一、伊勢か筆作に置て、ある説、宇田の御門へ奉るよしをいへり。当流には是を不用。

一、当流にたつる所は、伊勢と云女、七条の後の宮へ業平一期の事をかたりたてまつるをしるせりと云。さるによりて、伊勢物語と定めたり。しかあれは、此間に業平か自筆の記も有へし。只物語なからと見侍へき也。されと、源氏物語のやうにはあらずと云。業平一期の事をかけり。中にせう／＼古き哥などもよせて書たり。皆作物語のさほうなり。

〔初段〕

昔 おとこ、うめかうふりして、ならの京春日の里に、しるよしして、かりに

るにけり。

一、むかし、男とは、当代の事をいはしのため也。只過つるかたはみづかむか
し也。昨日はけふの昔、けさは夕の昔なるへし。

一、うるかうふりと云事は初冠也。中将十六歳之時也。承和七年、於仁明天皇
内裏元服せし事也。

一、しるよしてかりにいにけりとは、しるよしは、知行なり(公)所といふ心
なるへし。かりにいにけりと云は、狩しに行事なり。

その里にいとなまめいたる女はらからすみけり。

一、いとなまめいたるといふは、ゆうげんなる心なり。

一、はらからとは、兄弟の事也。古註には、あり恒か娘といへり。当流には、
誰にてもあれかしといへり。

この男、かいまみてけり。おもほえず、ふる里にいとはしたなくて有ければ、
こゝちまこひにけり。

一、この男かいまみてとは、嫁する(云)心をもちゆる。是古註の儀也。かいま
みは、かきのあひたより見る(云)事を、当流にはよしといへり。しかはあれ共、
かすかといふ心は、あはれも驚れるにや侍らん、と東下野守はおしへ侍しなり。

一、おもほえずふる里にとは、有常か娘、五歳の昔、井筒のまごにをゐて、ふ
つふふまごの心を翹りし後は、はるかに年へたくりて侍は、今までひとりなあ
らしく、おもほえずといふ心なり。

一、いとはしたなくて有ければとは、はしたなくては、よく(云)のおりたる女

など云心也。はしたになしといふは、紙なごてうにたらぬを、はしたなると
いふ心也。古註には云。当流には、かゝるあれたる里に、はしたなく、かゝる
人のおもひの外に有心也。たとへは、よはき物にあらき風のつよくあたるを、
はしたなくあたるといふかごとし。いたはる心なり。是は女をほめたる(云)ろ
なるへし。

一、こゝちまこひにけりとは、きまにいへるかごとく、五歳の年、契り置しま
ゝ、我を待てゐたるやらん。又、よなる人にもまとひにけりといへり。

一、業平は平城天皇の孫也。南都に知行有ける。

かりきぬのすそをきりて、哥を書てやる。其男しのふすりのかりきぬをなんき
たりける。

春日野のわかむらさきのすりころもしのふのみたれかきりしられす

一、かりきぬとは、狩場へ出る時きる衣を狩絹と云り。

一、かりきぬのすそをきりて哥を書てやるとは、狩きぬのすそをきるといふ事
は、此女お(云)ありともよしやとおもひきりて、哥をやる心は(云)をこめて書た
り。此物語のちから面白くかけりと云り。

一、春日野の若菜とは、女のいみやうなるへし。

一、しのふのみたれかきりしられすとは、千々に心のまとひたるを、哥にてい
ひやる心なり。

となんおいつきていひやりける。続つゐておもしろき事とやおもひけん。

道のくのしのふもぢすりたれゆへにみたれそめにしわれならなくに

といふ哥の心はへなり。昔人は、かくいちはやきみやひをなんしける。

一、おひつきてとかくをは不用。追つめていひやると云よし。つめて面白き事といふは、次おもしろきと云をは不用。繞て面白きと云心を用。たとへは、河原大臣のよめる哥をとり出して、此返しに、女やるその哥の心をつきて、我哥にしてやる心也。しかれば、続の字の心かなへり、と当流の説成へし。

一、本河原大臣の心は、誰ゆへにかくみたれて侍るぞ。おことゆへにこそ、かくは侍れといへり。しかるを、今の返し哥にする時は、女あまた侍れば、誰故に、業平の心はみたれておはしますやらん、よもわれゆへにはみたれ給はしと云心なれば、ふるき哥をそのまゝをきて、心を新敷なして今の返哥にしたる事、いちはやき心とほめたるなるへし。

一、いちはやきとは逸早とかけり。みやひとは、嫁といふことなるへし。

秋の野につまとふ鹿になれをしそ嫁（ふ）みやひにたえてかひく／＼となく
女の心、也ひらとおなし心のうきをいふ也。是は古註の儀。当流には早卒也。
打つけなる心也。みやひ、なまき也。

第二段

昔、男有けり。ならの京ははなれ、此京は人の家またさたまさりける時に、西の京に女有けり。その女、世人にはまされり。その人、かたちよりは心なんまさりたりける。

一、ならの京ははなれとは、桓武天皇、延暦三年、ならより今の京につつり給

ふ。先、都のとこのほる間は、長岡に都をして、平安城の西京より次第に東京をしゆひす。是をいへり。西京に十二年ましましけるとなん。

一、西京に女有ける。古註には二条の后といへり。たゞやんことなき人なりと当流には見て、女をは誰ともいはず。是をふかき心なるへし。

一、その女世人にはまされ（ふ）げりとは、ことのほか、ならひなくうつくしき人の事とほめたることなる也。

一、その人かたちよりは心なんまさりたりけると、なをかたちよりも、心のゆうけんにおりかたきとほめあけたるなり。かやうにこまやかにみかけ心をこめてかける事、このものかたりのかんしんなり。

ひとりのみもあらさりけらし。それを彼まめおとこ、打物かたらひて、かへり来て、いかゞおもひけん、時は弥生のついたり、雨をほふるにやりける。

おきもせずねもせてよるをあかしては春のものとなかめくらしつ

一、ひとりのみもあらさりけらしと云は、清和天皇の皇女（ふ）にいひ定めたる人なれば、ひとりのみもあらさりけらしとかけり。

一、それを彼まめ男うち物かたらひてかへり来ていかゞ思けんとは、古註に云、忍ひく／＼二条の后にあひ奉住に、たゞならずおはしますと、業平につけ聞えしを、かなしとおもふ心なれば、打物かたらひてと、哀にことばをかけりといふ。

一、いかゞおもひけんとは、此事をかくと聞て、千々に心をめぐらして、思ひわけたるかたなき事をこめて書たる心なるへしと古註にはいへり。

一、雨をほふるにやりけるとは、そほふるは、そいふるといふ。又、細雨とて、

こまかにふる雨をもういへり。又、増ふるともいへり。仮初なから、恋の心も思ひも、次第／＼に猶つよくなるは、春雨の日をへてやみかたくつよくなることくに、おもひのよはらぬ事をこめてかけり。

一、おもせすねもせてよるをあかしては、この物おもひにせんかたなき心つくし、ねても寝いらす、おきてもいられねは、おもせすねもせずといふ。よるをあかすとは、千々にかなしき事を、此哥にあらはして、一首とくのほりて、心のさんましてあるを、夜の明るといへり。

一、春の物とてなかくらしつとは、春雨は長／＼しきものなれば、日暮し降たるしめやかなる雨中の心のさひしきてい也。下には、春宮の後の宮の事をおもひて、とやかくと千々に心をくたく間に、日も暮、時も移り侍る事をいへる哥なり。小野の小町か哥にも

花の色はうつりにけりないたつらに我身世にふるなかくせしまに
とこへるも、時つづる事をいふなるへし。

《第二段》

昔、男有けり。けさうしける女のもとに、ひしきもと云ものをやるとて、

おもひあらはむぐらの宿にねもしなんひしきものには袖をしつゝも

二条の後、また御門にもつかうまつりたまはて、たゞ人にておはししける時の事也。

一、けさうしけると云は、懸相と書。又、遊相とも書なり。

一、ひしきもといふ海草なり。

一、おもひあらはむぐらの宿にねもしなんとは、思ふやうにあらは、といふ心也。それは、思ふ人と打つれてねは、むぐらのやう、はにふのこやなどまつらからしと也。何に業平か哥はその心あまりてことばたらすとといふなり。

一、二条の後また御門にもつかうまつり給はてとは、御門にいひまためたる事なれ共、后をいたはりて、御名のたゞん事をかへて書たる事也。

一、たゞ人と書て、たたうと、愛にてはよむ也。是は当流のよみやう也。ならひたる人と、ならはてよむ人の、ちかひめたるへし。古今にも、よみくせを秘事に(傍書)も口伝云り。されは、人前にて物をよむ事、大事なるへし。聞人も、又、聞所あるはまれなるへし。

《第四段》

昔、男、ひんかしの五条に、きさいのみやおはししける西のたいに、住人有けり。それを、ほいにはあらて、心さしふかゝりける人、行とふらひけるを、む月の十日はかりの程に、ほかにかくれにけり。有所はきけと、人のゆきかよふべき所にもあらさりければ、猶つしとおもひつゝなん有ける。

一、東の五条にきさいのみやとは、染殿の宮の事也。西のたいに住人とは、二条の後也。

一、ほいにはあらてとは、あらはるゝ心也。顯意此字也。ほかにかくれにけりとは、二条后、父良長卿御もとへ、業平にあはせしとてやり給ひしをいへり。

一、猶つしとおもひつゝとは、名をうしと也。後の名のたち給はん事を、我身よりも、かなしめる也。猶つしとは不用。

又の年のむ月に、梅の花盛に、こそを恋ていきて、たちて見、みて見、れと、去年ににるへくもあらず。うちなきて、あはらなるいたしきに、月のかたふくまでふせりて、去年をおもひ出で、

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわか身ひとつはもとの身にして

一、又の年とは、二条の后にわかれて次の年の事也。かの住給ひし宮に行て見れば、去年にも似ず、物哀にて、宮もふりはてたる心ちして侍るを、あはらなるいたしきといへり。

一、月のかたふくまでふせりてとは、あなちぬるにはあらず。心をしつめて、目をふきまて、しはしこそ此比の事をおもひつらねて、哥によめる心也。

一、月やあらぬとは、月やは前の月にてはある。春やは春にてはあらぬ。我身はもとの身なれ共、こゝもとの気色、ことかはりはてぬるは何事そとおもへは、たゞいとをしくなつかしき人の住給はぬほとに、世の気色もかくおもはるゝ事也。

一、とよみて夜のほのく／＼と明るになく／＼かへりけるとは、夜の明るとは、心の、この哥よみて、心のおきらかなるやつになるといふ心となん。

第五段

昔、男有けり。ひんかしの五条わたりに、いと忍ひていきける。みそかなる所

なれば、門よりはえいらて、わらはへのふみあけたるつめちのくつれよりかよひける。人しけくもあらねば、たひかさなりければ、あるしき／＼つけて、そのかよひ路に、夜毎に人をすへてまもらせければ、いけともえあはて帰ける。さてよめる、

人しれぬわかかよひちのせき守はよひ／＼ことにうちもねななん

とよめりければ、いといたく心やみけり。あるしゆるしてけり。二条の后に忍ひてまいりけるを、世の聞え有ければ、せうとたちの守らせ給ひけるとぞ。

一、ひんかしの五条とは、女性などの御前にてはよます。ひんかしとはねてよむへし。定家卿申ためるといへり。みそかなる所とは蜜なる所也。

一、あるしき／＼つけてとは、告てなり。夜毎に人をすへてとは、二条の後の御兄弟たち也。

一、人しれぬわか通路の関守と、人といふは、悉くも帝皇などの御事を申。人のしける関は、逢坂の関、立田の関、須磨、ふはの関などいへるは、御門よりたてをかるれば、いかにもかたくもるへし。いまよめる哥の関は、君のしらぬせきなれば、そろかにもるごとも苦しからし。うちもねな／＼とよめり。是を哀かりて、あるしゆるすといへり。哥にめてたる心なるへし。

一、心やみにけりとは、心やましき事をいふ。染殿の后宮、業平を御れんみんなの御心なり。

一、せうとたちとは、二条の後の御あに照宣公也。太郎国経とは、照宣公の御兄なり。甚経卿など也。

第六段

昔、男有けり。女のえうましかりけるを、年を経てよはひわたりけるを、からうしてぬすみいて、いとくらきにきにけり。あくた川といふ河をいいていきければ、草のうへにをきたりける露を、かれは何ぞ、となんおとこにとひける。

行きまおほく、夜も更にければ、おに有所ともしらて、神さへいといみしうなり、雨もいたうふりければ、弓やなぐめををいて戸口におり、はや夜も明なんと思ひつゝぬたりけるに、鬼はや一口にくゑてけり。あなや、といひければ、神なるさはきに、えまかさりけり。やう／＼夜も明行に、見れば、ゐてこし女もなし。あしすつ／＼けりをしてなげとも、かひなし。

しら玉か何そと人のとひしとき露とこたへてきえなましものを

是は、二条の後の、いとこの女御の御もとに、つかうまつるやうにてる給へりけるを、かたちのいとめてたくおはしければ、ぬすみてをいて出たりけるを、御せうと堀川のおとゝ、太郎国経の大納言、また下らうにて、内へまいり給ふに、いみしうなく人有を聞付て、とゝめてとりかへし給ふてけり。それをかく鬼とは云也けり。いとまたわかつて、後のたゝにおはしゝ時にや。

一、女のえうましかりけるとは、えましき也。不得と云也。からうしてとは、辛の字也。しんらうの事也。

一、あくた川とは、みかは水のすゑなり。清和紫宸殿の間なり。いふ／＼の大みや川、是なり。

一、草の上に置露とは、二条の後の、御身のうへの事を尋給ふ事也。露はおもひの露なる入し。

一、行きまおほくとは、すゑのゆくに遠心也。鬼有所とは、清涼殿の絵に鬼をかきたりと云。神さへいといみしうなりとは、帝王を神によせて云。御けきりあるを、神なりといへり。雨もいたうふりとは、言言たつ事也。

一、鬼はや一口にくゑてとは、基経卿の取返し給ふ事也。清涼殿に鬼のまどて有也といへり。是によそへて書たる也。神なるさはきにまかさりけるとは、后を尋ね奉る事のはかしき事也。いてこし女もなしとは、つれてこしの心也。あしすりをしてなげともかひなしとは、業平かまたへなけきたる体也。唐のひつしは、つ／＼ちの花をくいて果也。足すりをすると、てきちよくとあしすつ／＼けりとよめり。それを心得て書たることはなり。

一、白玉か何そと人のとひし時露とこたへてきえなましとは、けにあたる事とて、おもひやみ侍らんと云こゝろなり。

一、下らうと云は四本也。大納言のつかさの事也。後のたゝにおはしける時とは、是も、二条の后をかゝへたる也。

第七段

昔、男有けり。京に有住て、あつまにいきけるに、伊勢尾張のあはひの海つらを行に、浪のいとしろうたつを見て、

いと／＼しく過行かたの恋しきたうちやましくもかへる浪かな

となんよめりける。

一、京に有侘であつまのかたにいきけるとは、東山へ行なり。ひんかしをあつまといへは也。

一、伊勢尾張の海つらとは、隠湯(ひそゆ)の道。すへに浪のいとしろうとは、涙の事なりと古註に云り。海つらとは、ういつらの事也。たとへは、業平を流罪せられんとせしを、染殿の后、色、清和へなけき御申有て、東山を出さるゝ時、道にてもころしや侍らんとて、めしるに、染殿より、藤原なる人をつけてやり給ふ。をくり付てかへる時、この哥を袖をひかへてよめるなれば、うらやましくも帰浪といへり。

《第八段》

昔、おとこ有けり。京や住うかりけん、東の方に行て住所もとむとて、友とする人、独ふたりして行けり。信濃の国浅間のたけに煙のたつを見て、

信濃なるあさまのたけにたつけふり遠近人の見やはとかめぬ

一、友とする人独ふたりとは、同罪にて、紀有常、平貞文(ひら)等也。

一、信濃の国浅間と云は、流罪の時、解(と)け(て)官する也。それをしななしと云也。それを信濃なるといへり。あさましく成行(なり)ころ也。

《第九段》

昔、男有けり。そのおとこ、身をよくなき物に思ひなして、京にはあらし、東

の方に住へき国もとめて行けり。もとより友とする人、ひとりふたりしていきけり。道知る人もなくて、まとひいきけり。三川の国八橋と云所にいたりぬ。そこを八橋といひけるは、水行川のくもてなれば、橋を八渡せるによりてなん八橋とはいひける。其沢の辺の木陰におりて、かれいひくゐけり。その沢にかまつはたいと面白くさきたり。それを見て、有人の云、かまつはたと云五文字を句のかみにすへて、旅の心をよめ、といひければ、よめる。

からころもきつゝなれにしましあれはるゝきぬる旅をしそおもふとよめりければ、みな人、かれいひの上になみたおとしてほとひにけり。

行くて駿河の国に至ぬ。うつの山にいたりて、我いらんとする道はいとくらうほそきに、つたかへてはしけり、物心ほそく、すゝろなるめをみる事とおもふ。すきやうしやあひたり。かゝる道はいかてかいまするぞ、といふを見れば、見し人也。京に、其人の御もとにとて、文を書て、

するかなるうつの山辺のうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり

一、身をよくなきものとは、無用と云也。あいらよにそむけは、よくなきものといへり。

一、友とする人とは、有常、平の貞文也。もとより友とするとは、旧友の事書たり。道しれる人もなくてとは、恋の道しれる人なき心也。たよりになき事をいへり。

一、三河の国八橋とは、女八人の事也。女は水なれば、はしは水といふ心なり。

一、八人の女の事、二条后、染殿、有常か女、染殿内侍、小野の小町、伊勢

齋宮、初章。

一、その沢のほとりとは、忠仁公の所也。まはは、水のうるほひある所なれば、忠仁公の余慶のうるほひの事をたとへたり。木の陰とは、忠仁公を大樹にうづへたとへたり。その所にゐて、物くをいへり。かれいひとは飯の惣名なり。ほとひにけりとは、みな人、業平を哀と思ひて、心のうちのうるほひを云。

一、ある人の云とは、忠仁公より。忠仁公は後の兄弟也。当流には、すきやうしや、たれともなし。

一、ゆき／＼て駿河の国にいたりぬとは、ゆき／＼てといふうちに、遠江の国の事をこめたり。我いらんとする道はいとくらしとは、忠仁公の所へ業平来る時の事也。つたかへての業平とは、忠仁公の一家一門富貴したる心也。物心細くとは、ころしもやせられんなど中将おもへはなり。

一、すくろなるめを見る事とは、すくろなるとは、こころならざる事なり。

一、すきやうさとは、蓮叔の御事也。二条の後の兄弟也。

富士の山を見れば、さ月の晦日に、いと白くふれり。

時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまたらに雪の降るらん

その山は、愛にたとへは、ひえの山をはたちはかりかさねあげたらんほとして、なりはしほしりのやうになん有ける。

一、時しらぬ山とは、清和天王御らくはつ、卅余年有し事を云り。人は皆五十六十にてこそ落髪もあれ、卅余にてある事は、時しらぬと也。御らくはつは、

貞観十八年五月晦日也。哥の下の句、かのこまたらとは、御子陽成天王につき

たてまつる人はそらす、清和天皇につき奉る人はかみをそれは、かのこまたらといふ。かみをは、雪をいたくといへは、雪とよめり。かやうの事は下にこめてよめる。上は、たゞ、さ月の山の雪のむらきえて富士の面白きと見侍るへし。しほしりと云事は、とかくさをせざるか、定家卿の御心にもかなへりと也。当流也。ひえの山をは都の富士といへり。中将とは清和の位のちかひたる事也。

猶行／＼て、武蔵の国と下総の国との中に、川有り。それをすみた川といふ。その川の辺にむれあて、おもひやれば、限なく遠も来にける哉と侘あへるに、渡守、はや舟にのれ、日も暮ぬ、といふに、乗て渡らんとするに、みな人、物侘しくて、京におもふ人なきにしもあらず。さる折しも、白き馬のはしとあしとあかき、しきのおほききなる、水の上に遊ひつゝ、魚をくふ。京には見ぬ馬なれば、みな人見知らず。渡守にとひければ、是なん都馬、といふを聞て、名にしほはゝいさことはんみやことりわかおもふ人はありやなしやととよめりければ、舟こそりて啼けり。

一、なを行／＼てとは、駿河の国より、伊豆の国、相模の国を心にこめて書たる也。武蔵の国と下総の国との中大なる川とは、武蔵守長郎(一)卿、下総守遠経卿、両卿、東山に法性寺川をへたて、住給ふを、かやうに書たり。すみた川は法性寺川の事也。曲水のえん有。曲九(一)のえんとは、陽成天王、法性寺河にて、河せうようとして、遊ひ給ふなり。

一、渡守とは、照宣公、関白にて侍しを云。世をわたすは路なり。船にのれと

業平をいふは、陽成天王の御代なれば、出てつかはれよと云心也。日も暮ぬとは、先帝、床(ふし)御なりたる心也。君は船、臣は水なれば、舟にのれといへり。しろき鳥とは陽成天王。帝王、しろき御しやうそくめしたる事也。はしと足とあかきは、御口とかはかまのあかきを云也。しきの大きほとこのとは、漢高祖を司宜公といへり。されは、今の陽成院御せい、かうその御代程なりといふ心なり。

一、水の上に遊ひつゝ魚をくふと、臣は水なれば。

一、名にしおはゝいさことはんとは、業平と陽成と、親子となりのあふ日なれば、皆人物怪しくてなと書たり。我おもふ人は有やなしやとは、陽成の御親の此世に有かなきかと尋る心也。その故は、業平は親なれば此世に有物を、清和の御子と心得て、親はなまと思召かの心也。扱こそ、舟こそりて啼とはいへり。舟こそりて鳴とは、船は王なり。こそるは恋るゝ。思和て見るへし。君恋てなくとはいへり。これらはそこにこめて、哥の上は、かきりなく遠くも来にける哉と、東の方になかされてよめる哥にて、おもふ人とは、都にをける人達を思ひて読る心面白哀也。当流に此心を用也。古註の儀は、事おほければ、かゝす。

《第一〇段》

一、昔、男、武蔵の国までまことありきけり。扱、其国にある女をよはひける。父はこと人にあはせんといひけるを、母なんあてなる人に心つけたりける。父

は猶人にて、母なん藤原なりける。さてなんあてなる人にとおもひける。このむこかねによみておこせたりける。住所なんいるまのこほり三吉の里なりける。みよしのゝたのむの雁もひたふるに君かかたにそよるとなくなるむこかね、返し、

我かかたによると啼なるみよしのゝたのむのかりをいつかわすれんとなん。人の国にても、なをかゝる事なんやまさりける。

一、むさしの国とは、有常、武蔵守にて侍る所へ、行たる事をかく云り。父はこと人にあはせんとは、平貞文を聲にとるへき心あてなり。母はあてなる人につけたりけるとは、業平をあてなる人といふ。父はなを人にてとは、いやしき心にてとなり。母なん藤原なりける、さてなんあてなる人にておもひけるは、母は、藤原良門の娘なれば、心ゆふけんにて、業平にとおもへる也。むこかねとは、器量とかけり。

一、たのむの雁もひたふるには、田面のまつりとして、聲に成へき人、数多のそめは、そのかたを知るへきために、雁をとらへて、田の中へゆきて、男の望むかたへへいをたてゝ、雁を中にてはなしやれば、雁の行たるかたの聲をとれば、中もよく、さかゆる程に、うらかたにへふ。ひたふるとは、一向にと云こととはなり。ひとむきにとき云也。返しの哥に、たのむのかりをいへる(云)忘れんといふ事は、業平、この母の心さしを、世々せかい忘ましきと悦心也。

《第一一段》

昔、男、東へ行けるに、友達共に、道よりいひをこせける。

わするなよほとは雲井になりぬとも空行月のめくりあふまて

一、東のかたとは、ひんかし山の事也。友とするなどは、左馬頭中基、橋為基等也。貞観四年也。

《第二段》

昔、男有り。人の娘をぬすみて、武蔵野へいてゆくほとに、盗人成ければ、国のかみからめられにけり。女を草むらの中にきて、にけにけり。みちくる人、この野はぬす人なりとて、火つけんとす。女、わひて

武蔵野はけふはなやきを若草のつまもこもれりわれもこもれり

とよみけるをまきて、女をはとりて、ともにあていにけり。

一、人の娘をぬすむとは、長良卿の娘、二条の後の御事也。武蔵野へ行といふは、春日野にむさしといふ事あれば、武蔵へ行といへり。国のかみからめられにけりと申せば、からめられけりといふ。からめらるゝとしかり給ふ心つかひを、からめらるゝと書たり。

一、女を草むらの中にをぐとは、女を若草といへは、女の中におしこめてをく事を云り。又、みちくるとは、満(マノミチ)来(マノケル)と書たり。大せいの人のある事なり。

一、火をつけんと云事は、しそくをまして見侍る事なり。大里に、武蔵野を書たる御座敷也。そこにての事也。

《第三段》

昔、武蔵なる男、京なる女のもとに、聞ゆればはつかし、きこえねはくるしと書て、うはかきに、むさし鏡と書て、をこせて後、音もせず成ければ、京より女、

武蔵あふみさすかにかけてたのむにはとはぬもつらしとふもつるさしとあるをみてなん、たへかたき心ちしける。

問へはいふとはねはうらむむさしあふみかゝるおりにや人はしぬらん
一、武蔵なる男とは、有常を武蔵守と申ける時、かの所に、中将、聲にて侍し時。京なる女とは、兄行平の娘四条后にて侍る所へ侍る事也。

一、むさしあふみとは、かけておもふ事也。殊にはなれぬ中と云心なり。

《第四段》

昔、男、みちの国にすゝろに行いたりにけり。そこなる女、京の人はめつらかにやおほえけん、せちにおもへる心なん有ける。さて、かの女、

中／＼に恋にしなすは桑にそなるへかりけるたまのをはかり

哥さへそひなひたりける。さすか哀とやおもひけん、いきてねにけり。夜ふかく出にければ、女、

夜も明はきつにはめなてくたかけのまたきに啼てせなをやりける
と云へるに、男、京へなんまかるとて、

くりはらのあねはの松の人ならばみやこのつとにいきといはましを

といへりければ、よろこほひて、おもひけらしとそいひおひける。

一、みちの国にすゝろに行とは、二条の后か親長良卿、大原に住給ふ所を、奥州守にて侍し程に、かやうに申也。

一、此段は、大納言福丸、奥州の国司にて下し時の事也。女は宋(ふ)女也。万葉集の事也。中将と後の御事に引合て書たる也。古註の説也。当流にも是を用也。

一、中(く)に恋にしなすとは、二条後の事を云也。

一、うたさへそひなひたりけるとは、ひなひは、田舎めきたると也。まつにはめなてとは、きつねにくはせたまきと云心也。

一、陸國にくり原と云所に、あねはの松とて、名木侍る。大納言福丸か宋(ふ)女をさして、此松にたとへていひける事也。あの松のやうにときは(付箋)にあらば共(二)辺に有(一)かきはに都へもつれて行へき物と説心也。

一、よろこほひてとは、陸の国のこととはなれば云ける。

《第一五段》

昔、男、みちの國にて、なてうことなき人のめにかよひけるに、あやしうさやうにてあるへき女ともあらず見えければ、

しのふ山忍ひてかよふ道もかな人のこころのおくも見るへく

女、かきりなくめてたしとおもへとも、さるさかなきあひす心を見ては、いか

はせんは。

一、なてうことなきとは、なにこと也。やんことなき人の事也。二条の後の御事也。しのふ山のひてといはんため也。君の御心のおくを知らたきと也。

一、えひす心とは好色の心也。また、たはひ(ふ)かたなくすなる心なり。

《第一六段》

昔、紀有常と云人有けり。三代の御門につかうまつりて、時にあひけれと、後は世かはり時移りにければ、よのつねの人のこともあらず、人からは、心づつくしうあてはかなる事をこのみて、こと人にも似ず、まつしくへても、猶昔よかりし時の心なから、よのつねのこともしらす、年ころあひ馴たる(ふ)人、やうく(と)なれて、終にあまに成て、あねの先立てなりたる所へ行を、男、まことにむつまじき事こそなかりけれ、今はと行を哀と思ひけれと、まつしければ、するわさもなかりけり。思侘て、念比にあひかたらひける友たちのもとに、かうく(一)いまはとてまかりけるを、何事もいさかなる事もえせてつかはすことゝかきて、おくに、

手をおりてあひみしことをかそふれば十といひつゝよつはへにけり

かのと私たち、是を見て、いと哀とおもひて、よるのものまでおくりてよめる。

年たにも十とてよつはへにけるをいくたひ君をたのみ来ぬらん

かくいひやりたりければ

これやこのあまのはころもむへしこそ君かみけしとたてまつりけれ

よろこひにたへて、また、

秋や来る露やまかふとおもふまであるはなみたのふるにそ有ける

一、御門三代につかうまつるとは、淳和、仁明、文徳三代也。

一、有常は惟高の御子御母の兄也。時にあひけれと後世かはり時つとりとは、

惟高は清和天皇の御兄なれ共、御代清和へまいる間、世かはりと云。惟高は有

常かおいてましまし候ほとに、有常もその御ひかりにさかへて侍し。業平も

有常か聲にて侍し。されは、清和へ御代まいれば、惟高方は、みな所領もとら

れ、人のもちいもなければ、住人なり。されは、まどしくへても、なをむかし

よかりし時と書たり。をとろへて後は、年ころ相馴たる女やうくとこはなれ

は終にあまになりてあねのさきたちなりたる所へゆくとは、大原に住侍る也。

当流の儀也。また、深草に住ともいふ方有。前後有へし。

一、念比にあひかたらふ友たちとは、業平の事也。手をおりてあひみしことを

かそふれば十といひつゝ四はへにけりとは、十苑四は四十年の事也。

一、よるのものまでをおくりてよめると云たるは、あまたとゝのへてつかはし

侍る事は、よるの物までと云にきこえたり。有常は此世の御契りたにも四十年

にて侍るか、五百姓契りて夫婦となる物をと云、千度契りて親子となると云本

文の心なるへし。我も、聲は子なれば、いく度君をたのみきぬらんとなり。大

切に思ふ心を深くこめてよみたる哥なるへし。

一、これやこのあまのは衣とは、天人の衣也。業平は天上人のきたる衣なれば、

うつくしきといへり。むへしは道理也。

一、君かみけしとは上衣の事也。たてまつるとはきぎの事也。よろこひにたえて
とは堪也。あるはなみたのふるとは、□雪の泪也。よのつねのことおもあらずと
は、貧にてもへつらい、富てもをこるなり。さもあらずと也。

《第十七段》

年ころをとつれさりける人の、桜の盛に見え来りければ、あるし、

あたなりと名にこそたてれ桜花としにまれなる人もまちけり

かへし、

けふこすはあすは雪とそふりなましましきえすはありと花とみましや

一、年ころをとつれさりける人とは、業平、三年こさりける事也。あるしとは

有常か女(そ/ムスメ)也。津の国にての事也。けふこすはあすは雪とそふり

なましとは、三年過は、人のつまになるへき事を云。きえすはありと花と見ま

しやとは、雪はきゆる物なれと、残□てありとも、我はなと見ふ(み)するかと

也。

《第十八段》

昔、なま心有人なれば、心みんとて、菊の花のうつろへるをおりて、おとこの

もとへやる。

くれなゐに匂ふはいつらしら雪の枝もとをゝにふるかとそみゆ

おとこ、しらすよみによみける。

紅に匂ふかうへのしら病は折ける人の袖かとも見ゆ

一、なま心有とは、小町か事也。なま心とは、善心と書たり。おとこちかうとは隣家也。くれなゐに匂ふはいつらとは、好色とは、業平をいへ共、色なることとはなし。たゞ、雪のみしろくふりてこそといへり。とをくは、たはみたる心なり。

一、男しらすよみとは、返しをしたるはよまか、せぬかよまか、しらすなから、返しをしたる心也。ひけなり。

《第一九段》

昔、おとこ、宮つかへしける女のかたに、こたちなりける人をあひしりたりける。ほともなくかれにけり。おなし所なれば、女のためにはみゆる物から、男はある物かともおもひたえ(た)す。女、

あま雲の上所にも人のなり行かさすかには見ゆるものから

とよめりければ、男、かへし、

あま雲の上所にのみしてふることはわかいるやまの風はやみなり

とよめりければ、また男有人となんいひける。

一、宮仕しける女のかたにとは、染殿の后宮御かたと也。こたちとは、女房達の惣名也。染殿の内侍か事也。あま雲、天の雲なり。よ所といはん枕こととは也。返しにあま雲とよめるは、雨の雲也。扱こそふるとうけたりけれ。わかある山の風はやみとは、なんちかある山也。光孝新王のさるあひなれば、おそろしと

いふ心也。

《第二〇段》

昔、男、大和に有女を見て、よはひてあひにけり。さて、ほとへて、宮つかへする人なりければ、かへりくる道に、弥生はかりに、かえての紅葉のいとおもしろきを折て、女のもとに道よりいひやる。

君かため手をれる枝は春なからかくこそ秋のもみちしにけれさて、やりければ、返事は京に来てなんもてきたりける。

いつのまにうつろふ色のつきぬらん君か里には春なかるらし

一、大和にある女とは、有常か娘也。かへりくるとは、京へのほる事也。かえての紅葉とは、若葉也。

一、かくこそ秋の紅葉しにけれと、有常か娘の心のうつりやすきことの、たのみすくなき事を云り。返しは京に来てもてきたるなり。

一、返事は、いつのまにあかれまいらせしやらん。君か里にはとは、業平か住所には春のなきかといひかへしたり。

《第二一段》

昔、男女、いとかしこくおもひかはして、こころなかりける。さるをいかなる事か有けん、いさゝかなる事に付て、世の中をうしと思ひはて、いなんと思ひて、かゝる哥をなんよみて、物に書付ける。

出ていなは心かろしといひやせん世のありさまを人はしらねは

とよみをきて、出にけり。此女、かく書置たるを、けしう、心をくへき事もおほえぬを、何によりてかかゝらんと、いたうなきて、いつかたにもとめゆかんと、門にいて、と見かうみ見けれど、いつこをはかり共おほえさりければ、かへりりて、

おもふかひなき世なりけりとし月をあだに契りてわれやすまるし
といひてなかめをり。

人はいさおもひやすらん玉かつらおもかけにのみいと見えつゝ、
此女、いと久しくありて、ねんしわひてにやありけん、いひをこせたる。

今はとて忘るゝ草のたねをたに人のこゝろにまかせすもかな
返し、

わすれ草うふとたにきく物ならはおもひけりとはしりもしなまし
またく、有しよりけにいひかはして、おとこ、

忘るらんとおもふ心のうたかひにありしよりけにもそかなしき
返し、

半大にたちある雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな

とはいひけれど、おのか世に成にければ、うとく成にけり。

一、けしうとは、あやしう云心なり。おのか世になるとは、小町は大江の
惟教かめになりて、つくしへ行、中将は有常か娘につく。されは、おのか世
に成と云也。

《第三段》

昔、はかなくて絶にける中、猶や忘れさりけん、女のもとより、

うきながら人をほえしも忘れねはかつうらみつつなきをぞ恋しき

といへりければ、されはよといひて、おとこ、

あひ見ては心ひとつを川嶋の水のなかれてたえしとおもも

とはいひけれど、その夜にけり。いにしへ行さきのこゝ井なといひて、

秋のよの千夜を一よになすらへてやちよしねはやあくときのあらん
かへし、

秋の夜の千夜を一よになせりともことは残りて鳥やなまなん

いにしへよりも哀にてなんかよひける。

一、昔、はかなくてとは、させるしるしもなくて也。女御(よ)よりとは、染殿
の内侍也。されはよとは、同心の心也。しかともに、別なる儀なし。

《第三段》

昔、いなかわたらひしける人の子とも、井のもとに出てあそひける。おとなに

成ければ、男女もはちかはしく有ければ、男、此女をこそえめとおもふ。女は

此男をこそおもひぬつゝ、おやのあはずれともきかてなん有ける。さて、かの隣
のおとこのもとよりかくなん。

つゝの筒井つゝにかけしまろかたけすきにけらしないも見ざるまに

をんな、返し、

くらへこしふりわけかみもかた邁め君ならすしてたれかあくへき

なといひて、終に本意のごとくあひにけり。扱、年比ふるほとに、女、親なく
たよりなく成まゝに、もうともにいふかひなくてあらむやはとて、河内の國
たかやすの郡に、いきかよふ所出来にけり。さりけれど、このもとの女、あし
とおもへる気色もなく、出しやりければ、男、こと心有てかゝるにやあらん
と思ひうたかひて、せんさいの中にかくれるて、河内へいぬるかほにてみれば、
此女、ようけさうして、打詠て、

風吹は沖つしらなみ立田やまよはにや君かひとりこゆらん

とよみけるを聞て、かきりなくかなしとおもひて、河内へもいかす成にけり。
まれ／＼かたかやすに来て見れば、初めこそ心にくゝもつくりけれ、今は打
とけて、手つからいひかいとりて、けこのうつはものにもりけるを見て、心う
かりて、いかす成にけり。さりければ、彼女、大和の方をみやりて、
君かあたり見つゝをやらんいこま山雲なかくしそ雨はふるこも

といひてみいたすに、からふして、やまと人、こんといへり。よろこひてまっ
に、たひ／＼すきぬれば、

君こんといひし夜ごにすきぬればたのまぬものゝ恋つゝそぬる

といひけれと、男すますなりにけり。

一、いなかわたらひしける人の子共とは、阿保親王の子業平也。有常か娘也。
ならにての事也。

一、筒のつとは調五と云。まろかたけとは丸生(カネ/マロカタケ)也。いもみ
さるまとは、媒也。ふり分髪とは、おさなき時のかみ也。かたすきぬとは肩過
也。たれかあくへきとは、女のかみを、むこになるものか、もとゆひを結びそ
むる也。七尺五寸のいとなるへし。弓のつるをひようするなり。

一、たかやすの郡に行所は、高安郡司忠雄か娘也。風吹はおきつしら浪たつと
は、まくらてには也。高安へ行をもいとほす、有常か娘は、色見する事もなく
て、けはひなとして侍るは、おそろしき山を業平かこゆるにと、男をいはひて、
きらふかほにあら(公)して、けさうして、うつくしくこうはくを身にぬるなる
へし。それをあはれかりて、たかやすへもゆかすと也。いひかいとりてけこの
うつはものにもりけるとは、賤き事をいはん為也。いかに心やすく共、かゝる
みつれなき事をはすまじき事也。是は皆古註の説也。当流には、つゝあつのと
は、いつゝといはんまくらこととは也。必五つのごとはにあらす。女、また、有
常か娘にあらす。女はたれにてもあれかしと也。男すますなるとは、高安へゆ
かぬ事也。

《第二四段》

昔、男、かたぬ中に住けり。男は(公)やつかへしにとて、別れおしみて行にけ
るまゝに、三年ごさりければ、侍(公)侘たりけるに、いと念比にいひける人に、
今宵あはんと契て、此男来りけり。此戸あけ給へとたゞきけれと、あけて、哥
を讀て、出したるける。

あま玉の年のみとせは(公)待わひてた(こ)よひこそ新まぐらすれ
といひ出したりければ、

あつみ言まゆみ月年をへてわかせしかことうるはしみせよ
と(こ)ひて、いなんとしければ、女、

あつみ言ひけとひかねと昔より心はきみによりにしものを

と(こ)ひければ、おと(こ)帰りにけり。女、いとかなしくて、しりにたちておひゆ
けと、えおひつかて、清水のある所にふしにけり。そこなる石に、をよひのち
してかま付けける。

あひおもはてかれぬる人をと(こ)めかね我が身は今そきえはてぬめる
と(こ)かきて、そこにいたつらになりにけり。

一、昔、男かた田舎に住けりとは、津の国、むはらの郡也。別れを惜みてとは、
上洛の時の事也。三年(こ)さりければとは、勅かんの事也。念比にいひける人と
は、さかの天皇第四恒康の親王也。

一、わかせしかことうるはしみせよとは、誓言也。上略のことは也。この哥
よく(こ)可心得と師説也。(付箋)ちか事神(こ)心得入し(こ)。

一、あつみ言の本歌、

ゆみといへはしな(こ)きものを梓(こ)まゆみ月ゆみしな(こ)そあさるし

と有り。哥の心は、君に心ひきて年を経ぬるを、其間のちかいを、きみうるは
しくせよと也。うるはしきと云は、枕言葉也。誠に床しきなと云へり。

一、清水の有所にふしにけり。そこなる岩におよひのちしてかくとは、岩は硯

の事也。およひとは及也。ちしてとは、後の字也。のちに此哥を書てちよと云
事也。およひのちと云事を、おゆひをくるまりて、その血にて、岩に書付たり
と云をは、当りつにはあらずと(こ)へり。いたつらに成にけりとは、いたむかほ
の心なり。

《第五段》

昔、男有けり。あはしともいはさりける女の、さすかなりけるかもとに、いひ
やりける。

秋の野に篠わけしあきの袖のよりもあはてぬるよそひちまさりける
色(こ)のみなる女、かへし、

みるめなき我が身をうらとしらねはやかれなてあまのあした行(こ)く
一、あはしともいはさりける女は、小町か事也。当流にはたれともいはず。只
女とはかり云り。古註也。

一、秋の野にさ(こ)分しあきの袖とは、朝の袖也。篠分る中將とて、昔恋せし人
侍し野也。

一、我が身をうらとは、お(こ)このわか身うらと思ひて、あはぬに(こ)と云へり。
うらめしき事に(こ)へり。

《第六段》

昔、男、五柔わたり成ける女をえ(こ)すなりける事と怪たりける、人のかへり(こ)

と、

おもほえず袖にみなとのさはくかなもろこし舟のよりしはかりに

一、侘たりける人とは、業並也。返事したる人は、染殿の后也。とふらひ給ふことは也。えゝすとは、二条の後の事也。おもほえず袖にみなとのさはくとは、かやうに哀をかけてとふらひ給はんとはおもほえずと也。唐土舟のよりし斗とは、もろこし舟のよる津は富貴するなれば、そのやうに、わか心のうちかゆる／＼と侍ると云心也。袖のみなとは歡喜の調也。泪か。

一、もろこし舟も(公)よりし(の)の字は、やすめ字也。されは、よと(公)たまひめのほゝてみの尊を悉て、哥に、

あか玉のひかりはありと人はいへと君かよそひしたうとく有けり
此哥のしの字、休め字也。同事也。

《第二七段》

昔、おとこ、女のもとに一夜いきて、又もいかす成にければ、女の、手あらふ所に、ぬきすをうちやりて、たらいの陰にみえけるを、みつから、

我斗もおもふ人はまたもあらしとおもへは水の下にもありけり
とよむぎ、かのこさりけるおとこ、たちまゝて、

水口にわれや見ゆらんかはつきへ水の下にてもろこゑになく

昔、男、女のもとにとは、二条の后也。当流は、いつれの女にてもあれかしとなり。

一、ぬきすとは、たらいの上にしく簾也。それをとれば、下成たらいの水にかけの見ゆるなり。

一、みなぐちに我やみゆらんとは、かはつは、しほ時にみな口よりなけば、田にあるかはつも、おなしやうに鳴事也。そのごとく、我おもひにひかれて鳴給へるかと也。

《第二八段》

昔、色好なりける女、出ていにければ、いふかひなくて、おとこ、

などてかくあふこかたみとなりにけん水もらさしとむすひしものを

一、色このみとは、小町か事也。男、水もらさしとは、むつまじき事也。あふこかたみとは、あふこことかたき也。当流には、あふかきりのかたき也。期の字也。それを籠にたとへたり。かたみにて水くめは、浅てはかなき事を云。

《第二九段》

昔、春宮の女御の御かたの花のかにめしあつけられたりけるに、

花にあかぬなけきはいつもせしかともけふのこよひににるときはなし

陽成院は、貞観(元)クワン(一)十一年、太子にたつ。花の賀の事は、染殿の后四十賀をいう。この女御、二条の後のし給ふ也。奉行、業並つけ給りて、とりをこひし程に、二条后に立まはしり申、下心、うれしくまめしくて侍るに、日も暮すきかたになれば、かなしとおもひて、心をこめて、花にあかぬなけき

はいつもせしか共けふのこよひにける時はなしとよめり。当流也。古註には、
一条の後の廿賀と云也。

《第二〇段》

昔、男、はつかなりける女のもとに、

あふことは玉のをはかりおもほえてつらき心のなかく見ゆらん

一、はつかなりける女とは、鑿なる女と云心也。一条の後の御事也。あふ事は
珠数つ(ふ)づりの程にて、つらきころはなかくと也。

《第二一段》

昔、男、宮のうちにて、あるこたちの御つほねのまへをわたるに、なにのあた
にかおもひけん、よしや草はのならんさかみんといふを、おこ、
罪もなき人をつけへはわすれ草をのかうへにそおふといふなる
といふを、ねたむ女も有けり。

一、染殿の内侍染殿の後の御所也。こたちとは伊勢也。業平はのろいなとなり。
本哥、

忘れ行つう(ふ)きは(ふ)いのちあらはよしや草はのならんさかみん

ねたむ女も有けりとは、そめとの、後の御事也。

《第二二段》

昔、おこ、物いひける女に、年比有て、

いにしへのしつのをたまきくりかへしむかしをいまになすよしもかな
といへりけれど、なにともおもほすや有けん。

一、物いひける女とは、一条の后也。后にまいり給ひて後の也。哥に儼なし。
当流には、前にいへるかこづく、たれともなし。

《第二三段》

昔、男、津の国、むはらの郡にかよひける女、このたひいきては、又こしとお
もへるけしきなれば、おこ、

昔辺よりみち来る汐のいやましに君に心をおもひますかな

返し、

こもり江におもふ心をいかてかは舟さすきはのさしてしるへき

る中人の事にては、よしやあしや。

一、むはらの郡にかよひける女とは、有常か娘也。母の所領をゆつりえて、知
行しける也。この度いきてはこしとは、業平かてい、物つけに見えけるを云。
されはよと也。流罪にあへり。女の男なとにむかひてのろはしき事を云は、か
つは神の告と心得て、よくつゝしむへし。口伝尋ぬへし。田舎の人の哥にては
よしやあしやとは、伊勢なり云言葉也。ほめたる心なり。

《第二四段》

昔、男、つれなかりける人のもとに、

いへはえにいはねは胸にさはかれて心ひとつになけくころかな
おもなくていへるなるへし。

一、いへはえにとは、縁にと云心也。四条の后也。おもなくてとは、おもてつ
れなくて也。兄行平の女也。

《第三五段》

昔、心にもあらてたえたる人のもとに、

玉の緒をあはをによりてむすへればたえての後もあはんとそおもふ

一、心にもあらてたえたる人とは、二条の后也。玉の緒をあはをとは、あはせ
たるいと。心にもあらて絶たるとは、二条后なれば、心にもあらてたえたるな
るへし。合たるいとは、たゆれ共、あまたの糸数なれば、其うちに一筋も絶ぬ
糸有ぬへしと、契に懸て、書なせる也。

《第三六段》

昔、忘れぬるなめりこといひことしける女のもとに、

谷せはみみねまでへる玉かつらたえんと人にわかおもはなくに

一、忘れぬるなめりこといひことしける女とは、兄行平の娘也。谷せはみと
は、有原氏のせはきこといふ也。みねまではへるとは、清和へ后にまいり給
ふ事を云也。かく絶むとはおもはぬ物を云也。

《第三七段》

昔、男、色好なりける女にあへりける。うしろめたくやおもひけん、

我ならて下ひもとくな朝かほのゆふかけまたぬ花にはありとも
かへし、

ふたりしてむすひしひもを独してあひみるまではとかしとそおもふ

一、色のみ成ける女は、小野の小町也。哥に憐なし。賢女而夫にまみえす
の心也。

《第三八段》

昔、紀の有常かりにいきたるに、ありきておそくきけるに、よみてやりける。

君によりおもひならひぬ世の中の人はこれをや恋といふらん

返し、

ならはねはよの人ことに何をかも恋とはいふことひしわれしも

一、有常、甲斐の国へ下し時の事也。馬のはなむけせんとて行たる也。哥の心
は、恋と云事をはしらぬ身にて侍れと、けふ有常を待かねて、恋の心をかつし
る心也。返哥、又、我も恋といふ事はしらぬを云也。

《第三九段》

昔、さいめんの御門と申す帝おはしましける。その御門のみこ、うせ給ひてお

ほんはふぶりの夜、その宮のとなりなりける男、御はふりみんとて、女車にあひのりて出たり。いと久しうゐていて奉らす。打啼てやみぬへかりけるあひたに、あめのしたの色好の源のいたる云人、是も物みるに、此車を女車と見て、よりきてとかくなまめくあひた、彼いたる虫を取て、女車に入たりけるを、車なりける人、このほたるのともす火にやみゆらん、ともちげちなんとて、のれる男のよめる。

出ていなはかきりなるへしともしけち年経ぬるかたなくこゑをきけかのいたる、かへし、

いとあはれ啼そまきこゆるともしけちきゆるものとは(並記も)われはしらすな

あめのしたの色好の哥にては猶そ有ける。いたるはしたかふかおほち也。みこのほいなし。

一、さいるんの御門と申は、淳和天皇也。みこうせ給てとは、嵯子内親王也。承和十五年(乙未)十五日死。はふりとは葬といふ。たひの事也。女車とは、中将有常か娘、同車也。車なりける人とは中将也。此ほたるのともす火とは、物おもひたる心なり。

一、出ていなはとは、此男をいていなはかきりなる心也。ともしけちとは、みこの命火の御事也。哥の心は、出ていなはかきりなるへみともしけち年経ぬるかたなく声をきけとよめるは、嵯子内親王、十九の御年かくれさせ給ふ。人はみな五十六にて身まかる事は本意也。廿にたにたり給はてかく成給へる事

はあへなき事成といはんために、とし経ぬるかたなくをはきかぬかと。それに、何のいみしき事有て、かゝるふるまひをはするそといさめ侍る心也。

一、返哥、いと哀なくそ聞ゆるともしけちきゆる物とはわれはしらすな、いと哀なくそ聞ゆるは、あはれにもない也。本来の心、消つうせつする物にあらずあやまつてせうめつをたつるか、きゆる物とはわれはしらすなとも、又、しらすと云と云心也。されは、天下色好の哥にて猶そ有けるとほめたることは也しかは哀とも。みこのほいなしと伊勢か書たるは、いたるをおさへたるなるへし。おそるへき事をは恐れ、あはれむへき事をおはれむこそ、かゝつてさんけのたてなれ。人かをあらそふはまたほんふけんなりと云か。

一、いたるは河原大臣の男也。源融、致、昇、順なり。さかけんし也。したかうは村上の天皇の時分の人也。心得かたし。後人のしるしたる心にや。但、諸本如此あれば也と先達も申めり。

《第四〇段》

昔、若き男、けしうはあらぬ女を(あらぬ女を)おもひけり。さかしらする親有て、おもひもそつくとて、此女をほかへおひやらんとす。さこそいへ、いまたおひやらす。人のこなれば、また心いきほひなかりければ、とゝむるいきほひなし。女もいやしければ、すまふちからなし。さるあひたに、思ひはいやまさりまざる。にい(公)かに、おや、この女をおひうつ。男、血の涙をなかせ共、とゝむるよしなし。出ていぬ。男、なく／＼よめる。

出ていなは誰か別のかたからんありしにまざるけふはかなしも

とよみて、たえ入にけり。おやあはてにけり。猶思ひてこそいひしか、いとかくしもあらしとおもふに、しんしちにたえいりにければ、まどひて願たてにけり。けふの入あひはかりにたえいりて、またの日のいぬ時斗にからうしていき出ける。

一、わかき男、業平也。けしうはあらぬ女とは、有常女。さかしらするとは、逆簪也。人の子なればまた心いきほひなかりければとは、気なき時の心也。業平の若き時の事也。ありしにまざるけふはかなしもとは、あはすしておもひしより、いまの別れはかなしきと也。

一、なをおもひてこそとは、名をおもひてこそ也。願たてけりとは、春日明神に申たり。昔のわか人は、さるすける物おもひをなんしける。今のおきなほ、まさになんや。

一、昔の若人はすける物おもひをなんしけるとは、心やさしく、たえいる斗に有し。今の翁はまさになんやとは、すゑの世八十歳の翁といへ共、心上代にはおとり来。をろかにて、ゆうけんならしと也。伊勢か業平をほめたる心也。

《第四一段》

昔、女房(ふ)はらからふたり有けり。ひとりはいやしきおこのまつしき、ひとりはおてなる男持たりけり。いやしき男もちたる、しはすの晦日に、うへのまぬをあらいて、手つからはりけり。心さしはいたしけれど、さるいやしきわ

さもならはさりければ、うへのまぬのかたをはりやりて、せんかたもなく、たゝなまきけり。是を、かのあてなる男聞て、いと心くるしかりければ、いとけうらなるろうそくのうへのまぬを見て、やるとて、

むらさきの色こそきはめもはるに野なる草木そわかれさりける
むさしの心なるへし。

一、女はらからとは、有常か女一人の事也。あねは中将かめになる。いもうとは小野伊与助行長かめになる。

一、かたをはりやるとは、はりやふりて、なく事也。ろうそくのうへのまぬをやと六位の衣也。

一、めもはるにとは、目もはる見やりたる心也。
本歌、

むらさきの一もとゆへにむさし野の草はみなからなつかしきかな
といへる心也。女のゆかりなれば、哀に思ひやると也。紫は女のいみやう也。

《第四二段》

昔、男、色好としる、女をあひいへりけり。されとにくはたあらざりけり。しはといまきけれど、猶いとうしろめたく、まりとては、いかてはたえ有まへしかりけり。猶はたえあらざりければ、ふつか三日斗さる事有て、えいかてかくなん、

出てこしあとなにいまたかはらしをたかかよひちといまはなるらん

物つたかはしきよめるなりけり。

一、色このみとしるくとは、小町か事也。哥の心は、いてこし跡たにいまたかはらて、業平か座敷にゐたるやうに有へきぞ、それにもおそれすして、いかなる男をか引入てねぬるとつたかはしく、おもひうんしたる心也。

《第四三段》

昔、かやのみこと申けるみこおはしましけり。その御子、女をおほしめて、いとかしこくめくみつかう給ひけるを、人なまめきて有けるを、われはかりとおもひけるを、また人聞つけて、文やる。郭公のかたをかきて、

時鳥なか啼さとのあまたあれはなをうとまれぬおもふものから

といへり。此女、けしきおとりて、

名のみたつしての田おさは今朝ぞ鳴いほりあまたとうとまれぬれば

時は五月になん有ける。おとこ、返し、

いほりおほきしてのたをきはなをたのむわか住さにとこあしたえすは

一、かやのみこと申は賀陽親王也。桓武第七の王子也。

一、哥、した絵に時鳥をかたにかきたるかみ也。猶うとまれぬとは、うとまきと云心也。なか鳴とは、なんちかなく也。いほりあまたとは里の事也。いほりおほきしてのたをきはなをたのむとは、心やすむる里おほくとも、我と忘れ給はてをこつれ待れば、うれしかるへきと云心也。かくいへは、そこ心には、女をおさへたるふかき心なるへし。女は小野の小町也。業平は、われにはかり

とおもへは、賀陽親王とむつまじき道の侍る事を云也。

《第四四段》

昔、あかたへ行人に、馬のはなむけせんとて、よひて、うとき人にしあらざりければ、いへとつし、さかつきさへせて、女のさうそくかつけんすとす。あるしの男、哥よみてものこしにゆひつけます。

出てゆき(云)君かためにとぬきつれば我さへもなくなりぬへきかな

此哥はあるか中におもしろければ、心とめてよます、はらにあちはひて。

一、あかたへ行人とは、田舎下向也。甲斐の国へ有常下し時の事也。家とつしとは、有常か娘也。業平か妻也。哥をよみてものこしにゆひつけますとは、農

の腰に付る事也。我さへもなくなりぬへきなどは、農(云)不(云)ノ(云)の神とて、わさはひなることのあるを、この哥にて、道すからもゆるしかるまじき事也。

また、古郷にのこるをさへ、無事なるへき事と云也。

一、心とめてよますれば、おとこよみて、女の哥とて出したれば、よますると云心也。はらにあちは(云)とてとは、しんふにそみておもひいれたる哥成といふこと也。

《第四五段》

昔、男有けり。人の娘のかしつく、いかて此男に物いはんとおもひけり。うちいてん事かたくやありけん、(云)やみになりてしぬへき時に、かくこそおもひ

しかといひけるを、おや聞付て、なく／＼つけたりければ、まどひきたりければ、しにければ、つれ／＼とこもりおりけり。時はみな月の晦日、いとあつき比おひ(公)はあそひおりて、夜は更て、や／＼す／＼しき風吹けり。蛍たかう飛あかる。此男ふせりて、

行ほたる雲のうへまでいぬへくは秋風ふくとかり(傍書評)につけこせ暮かたき夏の日くらしなかわれはそのこと／＼なく物そかなしき

一、人の娘のかしつくとは、良相卿の娘、染殿内侍の姉也。業平を恋てしたる也。物やみになりてとは、恋にやめる也。あつき比おひによひはあそひおりてとは、きちうのうちなれば、僧達の心をも撫むる義也。

一、夜更てや／＼涼しき風吹けりとは、深人禪定の心也。すみやかにす／＼しき道にいたり給へと云心也。蛍たかう飛あかるとは、ほたるけんきの道理也。

一、行笛雲のうへまでいぬへくとは、彼禪定観法のくどくの心也。かりにつけこせとは、とそつのうてなにも、玉しものもこに、かくとつけよとなり。かりとは許こかくなり。くれかたき夏の日は、永日にても(公)物おもはぬ人也(てあ、くらしま)公(だかるへまぎ、かゝるなけきの身にては、さ侍るへしとの心になして、野の心を見侍るへし。

《第四六段》

昔、おとこ、いとうるわしき友有けり。かた時さらすあひ思ひけるを、人の国へ行けるを、いとあはれとおもひて、わかれにけり。月日へておこせたる文に、

あましくてたいめんせて、月日のへにける事、わすれやし給ひにけんといたくおもひ侍てなん侍る。世の中の人の心は、目かるればわすれぬへき物にこそあめれといへりければ、よみてやる。

目かるともおもほえなくにわすらる／＼ときしなればおもかけにたつ

一、人の国へ行けるとは、有常、かしの国へ下る事也。うたも憐なし。

《第四七段》

昔、男、念比にいかてとおもふ女有けり。されど、此男をあたりと聞て、つれなき(公)のまさりつゝいつる。

おほぬさの引手あまたに成ぬればおもへとえこそたのまさりけれかへし、

おほぬさと名にこそたてれな(公)れてもついでによる瀬はありといふ物を

一、念比におもふ女とは、一条后也。引手あまたとは、業平、心おほくてたのみかたき事を、後のよみ給ふ也。返し、なかれては、河のぬきなどはなかつ物なれば、かくいへり。

《第四八段》

昔、男有けり。馬のはなむけせんとて人を待けるに、こさりければ、いまそしるくるしき物と人またん里をはかれすとふへかりけり

一、待ける人は紀俊貞、阿波守にて下時の事也。

《第四九段》

昔、男、いもつとのいとおかしけ成けるをみおりて、

うらわかみねよけにみゆる若草をひとのむすはんことをしそ思ふ

ときこえけり。返し、

はつ草のなとめつらしきことの葉そうらなく物をおもひけるかな

一、いもつとは初草の事也。おかしけなるとは、ほめたる心也。ねよけにみゆるとは、草の根の事也。よき土にいてくる草は、根のよきによりて、葉もゆく／＼とあれば、うらわかみね云。ことをしそおもふとは、しはやすめ字也。

人のむすはんとは、人の人たるは王位の事也。后になるへき人となり。

一、返哥に、なとめつらしきことの葉そとは、かたしけなくふ便におもひてほめ給ふよと云心(人)也。うらなく物をおもふとは、偏にあわれみ給ふと、また業平をほめかへしたる心也。ねよけになとは、母は伊豆内親王、父は平城天皇の孫なれば、たねもはらもよき人にて、姿もつつくうまれ給ふと云心也。しゆく田に生たる草はかくのごとしと云。

《第五〇段》

昔、男有けり。うらむる人をつらみて、

鳥の子を十を(心)つとををはかさぬともおもはぬ人を思ふ物かは

といへりければ、

あき露は消えのこりてもありぬへしたれか此世をたのみはつへき

又、おとこ、

吹風に去年の桜はちらすともあなたのみかた人のこころは

又、女、かへし、

行水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふ成けり

又、おとこ、

行水にすくる月日とちる花といつまで(心)

あたくらへかたみにしける男女の、しのひありきしける事なるへし。

一、うらむる人とは小町也。鳥のことは、かひこの事也。本文に云、かのまつけに巢をくう鳥也と云。是をもととして、鳥の子を十つ、十は数百也。それを百かさね上る事は有とも、父母のほ(心)んはほうしかたしといへり。陣頭報恩記曰、恩至恩父母恩縦以會十空上百數百度重其恩難報。

一、こそこの桜はちらすともとは、文集に云、縦旧年之花残猶待後春難報是傍人心也。

一、行水に数かくとよめる哥の本哥

さりともかすかく水はあともなし君かつらさはつらさのみにて

此哥をとりて、業平と小町とよみし也。

《第五一段》

昔、男、人のせんさいに菊つへけるに、

うへしと(傍書)へは秋なき時やさかざらん花こそちらめ根さへかれ
めや

一、菊うふる庭とは、暹照か庭にうへける菊のたねを、二条の后宮に奉り侍るとなん云。たとへは、菊をうへは「うへは」といふなり。しはやすめ字也。うへつるうへは、花こそちらめ、根さへかれめやといへり。

一、秋なき時やさかざらんとは、秋といふ事のなからん年さかざらん事はしらす。根あれば、さくへきと也。秋なき時やさかざらんと云を、仙きやうの花は、常任不変にさく物なれば、秋なき時さくと云となり。是もそのすぢさへなきにはあらねども、是は前のごとほりかなへりと師説に侍りし。猶異儀あると云。

《第五二段》

昔、男有り。人の許よりかさりちまきをおこせたりける返事に、

あやめかり君はぬまにそまとひける我は野にいて、かるそわひしきとて、ましをなんやりける。

一、貞観十三年五月五日の事也。哥の心は、あやめかるぬまとは、二条后、忍ひて物をもわせ給ふは、ぬまの草ふかき事におもひなすらへたり。返し、我は野にいて、かるとは、男なれば、うちあらはれて物おもふと也。

《第五三段》

昔、男、あひかたき女にあひて物語なとする程に、鳥の鳴ければ、

いかてかは鳥のなくらん人しれすおもふ心はまた夜ふかきに

一、哥の心は、二条の后にあひかたき中なるを、心なく鳥の鳴と也。心なき章木たにもあわれはしるへきに、まして、てうるいつはきは、など心のなかるらんなりと也。のこれる時はき、哥うたはすといふ本文有。身にかゝらぬ事なれども、人のなげく時はなげき、悦ふ時は悦を、道しれる人といふへし。

《第五四段》

昔、男、つれなかりける女にいひやりける。

ゆきやらぬ夢路をたとるたもとは天津空なまつゆやおくらん

一、つれなかりける女とは、四条の后也。天津空なき露とは、涙の事也。集に入時は、天津空なる露と云て入となり。

《第五五段》

昔、男、おもひかけたる女の、えうましう成てのよに、

おもわすもありもすらめとことのはのおりふしことしたのまるゝかな

一、おもひかけたる女とは、二条の后也。えうましうとは、得ましき事也。清和皇女(ふ)なれば、業平かにはなるましきと也。哥の心は、おもはずは(ふ)とては、後の我をおもはずはましますらめとは思へ共、折ふしは(ふ)まひとたとおもひをかくる事也。

《第五六段》

昔、男、ふしておもひ、おきて思ひ、おもひあまりて、

我か袖は草の廬にあらねともくるれば露のやどり成けり

一、ふしておもひおきておもひ思ひあまるとは、恋のせつなる心也。奥儀ありとなん。二条の後の御事也。

《第五七段》

昔、男、人しれぬ物おもひけり。つれなき人の許に、

恋侘ぬ海土のかるもにやとるて、我から身をもくたまつるかな

一、つれなき人とは、二条の後の事也。もに住虫を我からといふ虫あれば、その名によせて云也。

《第五八段》

昔、心つきて色このみなる男、なか岡といふ所に家つくりておりけり。そこの

となり成けるみやはらに、こともなき女とものゝ中成ければ、田からんとて、

此男のあるを見て、いみしのすきものゝしわざやとて、あつまりていりきければ、(女)のおご(こ)に(つ)ふ(けて)おくにかくれければ、女、

あれにけりあはれいく世の宿なれやすみけん人のおとつれもせぬ

といひて、此宮にあつまりきゑて有ければ、この男、
律おひてあれたる宿のうれたきはかりにもおにのすたく成けり

とてなん、いたしたりける。此男(女)とて、ほう(傍書/下)ひ(傍書/上)はんと云ければ、

打怪ておち葉(ふ)ひろふときかませはわれも田つらにゆかまし物を

一、昔心つきてとは、心つくす事也。男は中将也。女は桓武天皇御子、生子内親王也。なか岡なる家は、中将母の伊豆の内親王の宮也。みやはらとは桓武天皇宮也。女ともとは皇女達也。中成ければ田からんとてとは、あなち田かるにはあらず。そのところのたみの田かるをみるていなり。いみしのすき物の

しわざは、門よりみ人なとも、心有て、宿の様もたゝならざるをほめ給ひて、

入きて、庭なとみ給ふ体也。男にくるとは、おそれかくるゝ心也。あれにけりあはれいく世のやととは、あるしかくるゝを、あるしなしといひかけ給ふ心也。御返しに、あれたる宿のうれたきとは、うれへたる家と云心也。鬼のすた

くとは、女を鬼と云也。心なき人をも鬼といふなり。此女とも、ほひろはんと云は、田からんといひつること葉のすあなれば也。うち怪て落葉ひろふとは、

ほはあらはるゝ心なれば、うちいてゝも、悉を申上げんと云也。

《第五九段》

昔、男、京をいか、思ひけん、ひんかし山にすまんとおもひいりて、

住侘ぬいまはかきりと山里に身をかくすへき宿もとめてん

かくて、物いたくやみて、しに入たりければ、おもてに水そゝきなどして、いきいてゝ、

わか上に露をそくなる天野(云)の川とわたる舟のかひの鞆か
となんいひて、いき出たりける。

一、京や住うかりけんひんかし山にすまんとおもひ入てとは、その時の関白は
忠仁公也。其所へ行て、かくと云て、とんせいし侍らんと也。かくて物(物)
いたくやみてとは、病心也。されは、しに入たりと云。是は貞観七年七月七日
也。

一、しに入たりければとは、おもひしつみたる儀なり。かほに水そ、きと云は、
忠仁公の、さのみ侍給ふへからず、かまりなき世のならひなれば、(つき)つ
き事もつきにてははつへからず、との給ひしを、うれしとおもひなくさめられ
まいらする事をいき出たりと云。されは、哥にも、我上に露をそくなるとは、
なくさめ侍ることはの露なるへし。天の川と渡る舟とは、七月七日なれば、当
座のとりあはせながら、舟とは君といへは、雲の上の事もこもれるにや。忠仁
公は、二条后のおちにてましますは、舟のゆかりにて、その御こととはなれば、
かひの鞆と云。かいと云物は、舟にそへるもの也。哥心は、た、かやうの事を
思へは、すかたもよろしからず。た、おもてにまかせ、心得へしとは、当流
の儀也。前は古註説也。

《第六〇段》

昔、男有けり。官任いそかしくて、心もまめならまりけるほどのいとくし、
まめにおもほんといふ人につきて、人の国へいにけり。此男、宇佐のつかひに

て(云)なんあるとき、女あるしにかはらけとらせよ、さらすはのましとい
ひければ、かはらけとりて、てをし(云)出したりけるに、さかななか(云)りけ
るたちはなをとりて、

五月まつ花たちはなの香をかけはむかしの人の袖のかそする
といひけるにて、思ひ出て、あまになりて、山に入てそ有ける。

一、いへのとうしとは小町也。まめに思はんといふ人とは、大江の惟章を男に
する也。宇佐の使とは、業平使(使)の事也。しその官人とは和承也。しそ
うとは大江の惟章也。

一、さ月まつ花橘とは、橘は五月の物也。四月なれば、さ月まつといふ。宇左
の官神事は四月也。昔の人の袖のかとは、小町か事をいへる也。本説は、橘は
とこよの国の物也。大唐王女、つか(云)りに、このたちはなをねかひ給ふほと
に、勅使、とこよへ行て、とりて帰るまに、皇女、死給ふ。そのひように手向
侍れば、そのさね生て、今に伝はりてよに侍ると云本文なり。

一、あまになりて山に入てそ有けるとは、小町、業平にめんほくなくて、あま
になりてとは、心なき身と云也。山とは、山(云)に成たるとなり。

《第六一段》

昔、男、つくしまていきたりけるに、これは色好といふすきものと、すたれの
内成人のいひけるを聞て、

染川をわたらん人のいかてかは色になるてふことのならん

女、かへし、

名にしほは、あたにそ有へきたはれ嶋浪のぬれきめきるといふなり

一、簾の内より業平をいろこのむ人と云は、平の定文かきもつと也。つくしに染川といふ川有。ものをそむる川ならは、なとか色にわたる(頭書)説)人の(傍書)は)ならて(傍書)なうて)はあらんと云心也。返哥に、たはれ嶋とは、風流嶋と書也。好色とはいへと、更にさもなしと。た、波のぬれ衣にてこそあれと云心也。染川は筑前にありと云。

《第六二段》

一、昔、年比をとつれさりける女に、心かしくやあらさりけん、はかなき人の事につきて、人の国なりける人につかはれて、もとみし人のまへにいてきて、物くはせなどしける。よさり、此ありつる人たまへと、あるしにいひければ、をこせたりけり。おとこ、我をはしるやとて、

いにしへのにほひはいつらさくら花こけるからともなりにけるかな

といふを、はつかしと思ひて、(云)いらへもせぬといへは、なみたのこほるゝに、目もみえず、ものもいはれずといふ。

是やこのわれにあふみをのかれつゝ年月ふれとまさりかほなみ

といひて、きめぬきてとらせければ、すてゝにけけり。いつちいぬらん共しらす。

一、をこつれさりける女とは、小町也。心かしくやあらさりけんとは、貧家

なる心也。惟章は、小町をつくしへつれてくたりたる人なり。しにてのち、みやこにかへるなり。

一、人の国なりける人につかはれてとは、元量親王、住吉に居給ひけるに、つかはれ侍る也。もとみし人のまへに出るとは、中将に見あひたり。新王にこいたてまつりて、その夜、あひたる事也。いにしへの匂ひはいつく(云)とは、中将かすかた心も、昔にもにす、年よりおとろへたと小町にいへり。花などをこきおとして、からになりたるやつになん侍るとつれへて云也。しかあれば、小町も、おなしころの年なれば、我身の事をも思ひ知侍るへし。

一、とし月ふれとまさりかほなみとは、われをまさりておもはぬと也。

《第六三段》

昔、世心つける女、いかて心なきけあらんおとこにあひえてしかなとおもへと、いひいてんもたよりなきに、まことならぬ夢物語をす。子三人を呼て、かたりけり。ふたりの子は、なまけなくいらへてやみぬ。三郎なりける子なん、よき御おとここそいてこんとあはするに、此女、けしきいとよし。こと人はいとなさけなし、いかてこの在も(云)中将とあはせてし哉とおもふ心有。かりしありきけるにいきあひて、道にて馬の口をとりて、かうくなんおもふといひければ、哀かりて、きてねにけり。さて後、おとこ見えさりければ、女、男の家にいきてかいま見けるを、おとこ、ほのかに見て、

百年にいとせたらぬつくもかみわれをこふらしおもかけにたつ

とていてたつけしきを見て、むはら、からたちにかゝりて、家にきて打ふせり。
男の、女のせしやうに、しのひてたりみれば、女、なげきてぬとて、

狭筵にころもかたしきこよひもや恋しき人にあはてのみねん

とよみけるを、おとこ、あはれとおもひて、その夜はねにけり。世の中の例として、おもふをおもひ、思はぬを思はぬものを、この人は、おもふをも、おもはぬをも、けちめみせぬ心なん有ける。

一、昔世心つける女とは、嫁たる女の事也。世に心をつくすと也。子三人持たるとは、此女、はしめは、源有国かつまにて、子二人有。大将源頼重、弟は大納言關路、これらなり。後には、文徳天皇の御子惟高親王をまうけ侍る也。さてこそ、子三人とは云たれ。三郎なる子とは、惟高親王也。よき御おとここそいてこんと夢をあはせ侍る事は、親、物にくるは、子ははやすましと云本文の心也。孝の道王子なるによりて、御心も有かたきためしなり。

一、親のねかひにまかせて、業平を引あはせんとて、馬の口をとりてと、口ひきを聞たる事をいふなり。

一、女おとこの家にきてかいまみけるとは、かきのひまより業平をのそきて見給ひしを、中将見つけて、百年の哥をはよめり。一切の物、百年経ては、はくものなり。とつたい、又、はづまなどのやうの物も、また、きつね、たのみなども、百年へ侍れば、はぐるなり。それを、百鬼やきやうといふ。もの神なると云て、人をやまする物也。ありき神といふ。百年に一とせたらぬほとと、さて、はげかねて、我に見つけられたるかといふ哥也。かやうにいふに、はち

てにけて女かへる也。あらき神の心といはんために、うはらからたちにかゝりてにけ行といへり。道にてもなき事をいはんため也。惣而はつかしき人の前へいつるは、まごに、むはら、からたちにかゝるかことと文せんにもいへりといふ本文有り。けちめ、驗此字也。広大慈悲の心なり。

—九州大学大学院博士後期課程—